えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

# えど友

EDO-TOMO

第79号
平成26年
(2014)
5－6

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京の庭園を巡る①　徳川家ゆかりの庭園
「浜離宮恩賜庭園」「小石川後楽園」……1～2
学習会「北区飛鳥山博物館」/ 平成26年度友の会事業について / 第14回定期総会開催のご案内……3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「絵馬あれこれ」、「べっ甲資料館を訪ねて」/ えど友サークルだより / 友の会めも
友の会セミナー「昌平坂学問所と江戸の学歴社会」……6
友の会セミナー「江戸を愛した男―名主・熊井理左衛門小伝」……7
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪－その10」/ 第6回「えど友研究発表会」発表者募集……8
友の会特別観覧会「大江戸と洛中－アジアの中の都市景観」/ 江戸博クリップ「寄席の楽しみ」……9
江戸名所図会を歩く⑬「萬松山東海禅寺から貴船明神社」……10
催事案内 / 会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京の庭園を巡る①

## 徳川家ゆかりの庭園
## 「浜離宮恩賜庭園」「小石川後楽園」

東京にはさまざまな特色を持った多くの庭園・公園があります。中でも以下にあげる都立文化財9庭園は、美しい風景と共に江戸東京の歴史が味わえる貴重な施設です。花や緑を愛でながら、歴史散策を楽しんでみませんか。

・浜離宮恩賜庭園　・旧芝離宮恩賜庭園　・小石川後楽園　・六義園
・向島百花園　・旧岩崎邸庭園　・清澄庭園　・旧古河庭園　・殿ヶ谷戸庭園

今回は徳川家ゆかりの2庭園をご紹介します。

### ●浜離宮恩賜庭園

江戸時代初期に作られた、日本を代表する大名庭園の一つです。大きな特徴として、「潮入の池」と「庚申堂」「新銭堂」という二つの鴨場の設置があげられます。

**＜庭園の歩み＞**

承応3年(1654)に4代将軍徳川家綱の弟、綱重が将軍家の鷹狩り場を拝領し、海を埋め立てて屋敷を建てました。その後甲府藩下屋敷として使用され、「甲府殿浜屋敷」「海手屋敷」と呼ばれました。

綱重の子、綱豊(のちの家宣)が5代将軍綱吉の養子になるとともに将軍家の別邸となり、「浜御殿」となりました。この時大幅な改造が行われて庭園が整備され、その後、歴代将軍による造園・改修工事が続き、11代将軍家斉の治世にほぼ現在の姿となります。

明治3年(1870)には新政府宮内省の管轄となり、「浜離宮」となります。同じ頃、石造り洋館の外国人接待所「延遼館」が竣工し、鹿鳴館が完成するまで迎賓館として使用されました。その後、関東大震災や第2次大戦中の空襲により甚大な被害を受けました。

戦後東京都に下賜され、昭和21年(1946)4月「浜離宮恩賜庭園」として開園しました。昭和27年(1952)には「旧浜離宮庭園」として特別名勝・特別史跡に指定されています。

**＜園内の見所＞**

・三百年の松……大手門近くにあり、家宣の庭園改修の偉業をたたえて、宝永6年(1709)に植えられたと伝わります。

・潮入の池……海水を導き潮の干満によって池の趣を変えたもので、現在も海水を引き入れているのは当園だけです。江戸時代には公家の接待やお庭遊びの際、舟遊び・釣り・漁の見物などが行われました。

・中島の御茶屋……宝永4年(1707)に設けられた園内最初の茶屋です。その後一度焼失しましたが再建され、明治12年(1879)には、ここで明治天皇に米国前大統領グラントが謁見しました。空襲で再び焼失、昭和58年(1983)に再建されています。現在は休憩所となっており、お茶をいた

▲潮入の池と中島の御茶屋

だくことができます。

・松の御茶屋……家斉の時代に設けられた茶屋で、明治２年(1869)には英国公使パークスとの会食場として使用されました。空襲で焼失しましたが、平成22年(2010)に復元されています。

・鴨場……庚申堂鴨場と新銭堂鴨場の２カ所があり、それぞれ安永７年(1778)と寛政３年(1791)に築造されました。かつては将軍の鷹狩り場で、特に家斉は数多く訪れています。現在では「小覗き」からのバードウォッチングが楽しめます。

・お上がり場……将軍が舟で御成の場合に使用した船着き場です。鳥羽伏見の戦いの時、大坂を船で脱出した慶喜はここから上陸しています。

▲諏訪流放鷹術の鷹匠

・年間を通してさまざまなイベントが催されますが、特に毎年１月２、３日には鷹狩りの様子を再現した「諏訪流放鷹術の実演」が行われ、多くの人が詰めかけます。

・かつて園内にあった五つの茶屋のうち、残りの三つの茶屋も順次復元されることになっています。現在「燕の御茶屋」の工事が進められており、来年３月に完成の予定です。

**＜花だより＞**

５月から６月にかけてはフジ、ツツジ、ハナショウブ、ガクアジサイなどが園内を彩ります。また、季節は外れますが、お花畑では春には菜の花、秋にはコスモスがあたり一面を埋め尽くします。

## ●小石川後楽園

江戸時代を代表する回遊式庭園です。広大な邸地に作られた庭園中央には大泉水が設けられています。また、小石川台地の起伏を生かして、日本各地と中国の景色を模した海・川・山・田園などの景観が表現されています。

**＜庭園の歩み＞**

寛永６年(1629)に水戸藩初代藩主頼房が中屋敷(後に下屋敷)を置いて作庭をはじめ、２代藩主光圀が整備しました。その後、歴代藩主による大小の改修が施され、庭園の形を変えながら、幕末に至ります。

明治２年(1869)、版籍奉還により最後の藩主昭武が邸宅と共に敷地を新政府に上地し、その後、敷地の一部が兵部省の所管となり東京砲兵工廠(軍需工場)が置かれました。以降も庭園の整備が行われ、国内外の賓客が訪れるようになります。

その後、東京市長が管理者となり、昭和13年(1938)に一般公開を始めます。すでに関東大震災で多くの建造物が焼失しており、残った建物も第２次大戦の空襲でほとんどが灰燼に帰してしまいます。

昭和27年(1952)、特別史跡及び特別名勝に指定されています。

**＜園内の見所＞**

・庭園には次の４つの景色が巧みな手法で配置され、景色の変化を楽しむことができます。

1．中島(蓬莱島)を中心とする大泉水とその周辺の「海の景」
2．西湖・渡月橋・大堰川・通天橋を結ぶ一帯の「川の景」
3．清水観音堂・小廬山・得仁堂・円月橋をつなぐ「山の景」
4．水田・菖蒲田・梅林の「田園の景」

・涵徳亭……林羅山の子・信篤により名付けられた茶屋です。関東大震災で焼失しましたが、昭和61年(1986)に再建されています。

・西湖の堤……中国の西湖蘇提を模したもので、作庭当時日本人のあこがれの地でした。かつては堤の真正面に清水観音堂が建っていましたが、関東大震災で焼失しています。

・大堰川……３代将軍家光の好みで造られたもので、多くの岩を配して京の嵐山の景色を模したものです。川に架かる通天橋の近くには「音羽の滝」という人工の滝がありましたが、元禄16年(1703)の大地震で龍滑車(水をくみ上げる装置)ともども崩壊しました。

・得仁堂……『史記』伯夷列伝に登場する伯夷・叔斉の木像を安置した堂で、作庭時から残った唯一の建物です。名称は得仁堂→釈迦堂→八幡堂→得仁堂と変わり、屋根の葺き方も茅葺→瓦葺→こけら葺→鉄板葺→銅板葺と変化しています。近年建物の傷みが目立っていましたが、今年３月に修復工事が完成しました。

▲円月橋

・円月橋……光圀に招かれた明の儒学者・朱舜水の設計と伝わる中国様式の橋で、関東最古の石造アーチ橋です。平成23年度に解体修理工事が行われました。

▲菖蒲田のハナショウブ

**＜花だより＞**

６月には菖蒲田にハナショウブが咲き誇り、見応えがあります。運が良ければ、花の間を散歩する鴨の姿を見られるかもしれません。

※参考資料

東京都公園協会発行『浜離宮恩賜庭園』『浜離宮の昔と今』『小石川後楽園』
東京都建設局『小石川後楽園の修復事業』パンフレット

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成26年３月２日）

# 北区飛鳥山博物館を訪ねる

友の会学習会第５回は、北区飛鳥山博物館を訪問しました。

北区飛鳥山博物館は、平成10年に開館、その後常設展示をリニューアルし、平成22年再オープンしました。

建物は１階が常設展示室、２階が正面玄関・特別展示室・講堂・ミュージアムショップ、３階が飛鳥山アートギャラリー・閲覧コーナーとなっています。

学習会は２階講堂で開催され、飛鳥山博物館鈴木直人学芸員より、当日配布資料「常設展示案内」図録を見ながら、図録にある14のテーマ順に説明していただきました。

概要の説明の後は、１階豊島郡衙（ぐんが）正倉（しょうそう）(復元)前より久保埜企美子（くぼのきみこ）学芸員も加わり、お二人で常設展示室内を案内、説明していただきました。

展示は北区の環境・風土から地域特性をとらえ、ほぼ年代順にたどれるように整理され、区の自然・歴史・文化を、「大地のおいたち(先史時代)」から「荒川の生態系(現代)」までおよそ３万年分の歴史を、CGビデオ映像・パネル展示・標本・出土品・実物大模型・復元・ジオラマ等で総覧することができる内容になっていました。

「縄文人のくらし」のコーナーでは、中里貝塚のはぎ取り標本やムクノキの１本をくり貫いて作られた丸木舟(全長5.8メートル、約4700年前)などが展示されており、縄文時代は北区が今よりもはるかに海に近かったことが見て取れるようになっていました。

徳川８代将軍吉宗は、飛鳥山に桜・楓・松の植栽を進めました。

歴代将軍の日光社参の休憩に利用していた金輪寺に懸け造りの舞台と御殿を建て、花見の御成を行いました。

吉宗は、王子とその周辺をたいへん気に入っており、北区の地域への御成は30回を数えたそうです。

飛鳥山は紀伊国の熊野権現を勧請した王子権現が祀られていたところなので、紀伊藩主であった吉宗にとって特に思い入れのある場所であったのではないかという説明を受けました。

案内の後は、金輪寺御座所の復元前でモニター画面を見て楽しんでいる方もいらっしゃいました。

開館時間10時～17時。観覧料一般300円、65歳以上150円、小中高100円(イヤホンガイド無料)。JR王子駅中央口から徒歩８分。

飛鳥山公園入口から飛鳥山山頂まで「あすかパークレール(無料)」に乗ると博物館まで楽に行くことができます。　　参加者70人。

【記録】文・写真：広報部会・竹中祐見子

# 第14回定期総会開催のご案内
## 多くの会員の皆さん、ぜひご出席下さい

今年も定期総会の季節がやってまいりました。会員が一堂に会する定期総会は、過去１年の活動を振り返り、本年度の活動について率直な意見交換をする場です。

同封の議案書をご検討いただき、多くの会員の皆さんがご出席くださいますようお願い申しあげます。

開催要領は次のとおりです。

**○ 平成26年度　友の会定期総会**

日時：５月30日(金)13時15分開会

会場：江戸東京博物館・１階ホール

◇ 主な議案

・平成25年度事業報告ならびに収支決算報告について

・平成26年度事業計画案ならびに事業予算案について

・その他

**○ 竹内館長の記念講演**

総会に引き続き、江戸東京博物館竹内誠館長による記念講演が予定されております。演題は「関ヶ原の戦いの裏舞台」です。ご期待ください。

**○ 会員交流会**

記念講演会終了後、16時45分より、７階・桜茶寮にて会員交流会(会費500円)が開催されます。会員同士の交流、親睦を深める良い機会です。ぜひともご参加ください。新入会員大歓迎です！

# 平成26年度友の会事業について

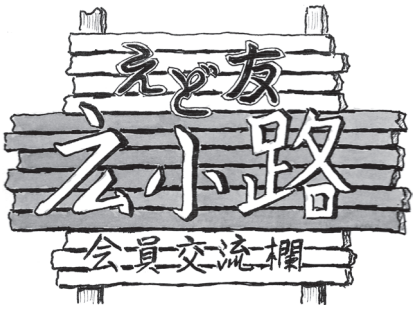
江戸東京博物館友の会会長　**畠中　勇**

会員の皆様には、日頃より友の会事業にご参加、ご協力いただきありがとうございます。

今年度も、古文書講座、セミナー、特別鑑賞会など皆様のご要望にこたえ、充実した内容で実施してまいります。加えて、会員サービス向上の一つとして、会報『えど友』や配布資料の一部カラー化をすすめます。見学会の広重『名所江戸百景』の浮世絵などが、カラーになると見た目に楽しいですね。

江戸博は、今年度常設展示室の改修工事を行うため、今年の12月から来年３月まで常設展示室は閉鎖されます。この間１階の特別展示室で、常設展で展示された資料を使い、特別展が開催されます。また、ホール、会議室等も使用が制限され、友の会事業にも影響が出ると予想されます。

今後、博物館のご協力を得ながら、会の事業に支障のないよう計画を進めてまいります。会員の皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。




# 会員からの投稿

## 絵馬あれこれ

佐藤光治

絵馬の代表的な風景といえば、年末年始時期、受験シーズンが双璧で、特に今年は干支が午年のため、例年以上に各地の寺社の境内で光彩を放っています。絵馬は通常「馬が描かれた板絵」を指しますが、現実は画題、材質、形状などに特に制限を設けず、あらゆるものが絵馬と呼ばれています。

絵馬の発生(誕生)に関連して、「神は祭礼行事などの時に天上より白馬(神馬)に乗って俗界に降臨して、神殿内に御神霊(御神体)が鎮座し、神事が終わると再び天上に戻って行く」との仮説の物語に出合って、神を身近に感じることもあります。実際に律令体制下になると、時の支配層は社前に生馬奉献(献馬)して所願成就を願う習俗が定着して、現在もこの習俗を継承している神社が散見されます。とはいえ、この信仰の行為は、飼養管理上多大の労力・費用がかかるため、広く社会に普及することなくその代用物が土馬、板立馬、純木製馬形、絵馬と、順次変化していったものと推察されます。

次に、馬の存在と絵馬の関係を少し述べて見ます。我が国の馬の存在は、中国の魏志倭人伝(3世紀)では否定されていますし、米国の動物学者で、大森貝塚の発見者でもある日本通のモース(1838〜1925)の著作「絵馬」にも馬の存在についてはほとんど記述されていません。国内で発掘された馬具、馬骨(古代馬の祖先か)は古墳時代中期(5〜6世紀)以降のものが圧倒的に多いようです。また仏教伝来(6世紀前半)以前より多くの渡来人(別称帰化人、4〜5世紀)によって、大陸の文化、技術などと一緒に馬が移入され、各地の官牧などで飼養されていたようです。以上のことから、遅くとも4世紀末頃までには馬が存在したと推定されます。

従前より時系列上新しいものとして紹介されてきた板絵馬が、大阪難波宮跡から、大化4年(648)と記された紀年銘の木簡と共に出土［平成11年(1999)発表］して、従来の認識を覆すとともに、呪術の道具として使用された形跡が見受けられました。

古くから共存共栄してきた神仏が明治元年(1868)の神仏分離令発布に伴い、寺院の相対的地位が急落し、寺院内の絵馬も衰退の時期を経験して、更に戦後は俗信・迷信などと同一視されましたが、昭和30年代後半に入ると、ようやく復活の兆しを見せ始め、その後上昇の道をたどり、現在に至っています。

絵馬を、「祈願」「報謝」の心情を神仏に伝える手段として位置付けるとき、信仰の世界を離れて平和な未来に向かって、その爽やかな行為が伝承されることを心から願っております。

—両国周辺散歩 小さな博物館—

## 「べっ甲資料館を訪ねて」

竹橋直久

### 愛すべきかなべっ甲

“かるみ”というと俳諧の境地に入るようであるが、私の長年愛用のべっ甲の靴べらに触れると、軽やかで艶やかな感触が味わい深い。セルロイドでもなく、コハクでもないその素材は、南方のタイマイという海がめの甲羅で、何枚も重ねて、必要な厚みを出すという。江戸時代には家康もべっ甲製のメガネをオランダ人から献上されている。当時は贅沢品の禁制を免れるためか、安価なスッポンの甲羅と偽って南蛮船をはじめとする交易がなされたという。抜け荷なる用語もこの頃から流行ったのであろう。

### 小さなべっ甲資料館

両国駅から、そう遠くないところにある「べっ甲資料館」は磯貝べっ甲専門店に併設されている。まさに小さな資料館だが、江戸から昭和の変遷をたどるミニ展示がユニーク。一方、店先には簪(かんざし)や細工物は言うに及ばず、べっ甲製品のオンパレードで目を楽しませてくれる。JR両国駅から徒歩10分、蔵前橋の東の裏通りに、墨田区の“産業や文化”を紹介する『小さな博物館』の一環として開設された。

インタビューに応じられた三代目磯貝英之さんのお話では、ワシントン条約で取引がままならなくなった「タイマイの甲羅」も、これまでの手持ちや、仲間内の融通、養殖などで何とか素材の確保はされているとのこと。

ショーウインドー内にある、灯りの作品は、二代目磯貝一さんが組立てたものだそうであるが、きっと灯りがともされればシェードから漏れる光はオツなものであろう。奥の間が工房で、壁にタイマイの剥製が掛けられ、彫金台のような作業台には“加熱装置”(べっ甲の膠(にかわ)ぶんを溶着し、所定の厚さにする)が目についた。工房の背後には“油圧プレス機”や、パフ磨きをかける“ポリッシャー”も鎮座している。

三代目英之さんはマイスター認定の所持者であるが、これから東京スカイツリーに赴くという。伝統ある商品を造る“職人の立場”と、現代のスカイツリーでの“営業の職分”とのコントラストに興味を覚えた。

### 周辺も訪ねてみよう

昼時であれば、北側へ少し行った所にあるチャンコの「吉葉」で、本物の土俵を目にしながらの腹ごしらえも良いだろう。その付近に「横綱

バーガー」なる店、南の蔵前橋通りには「相撲せんべい」の店もあり楽しめる。両国駅の南側ガード下に並ぶ店に立ち寄り、コハク色の飲み物で余韻を味わうも良し。
※べっ甲資料館の開館は月曜～金曜日。休館は土曜日、日曜日(不定休)。製作体験も可能。
開館時間10時～18時。電話03-3625-5875　〒130-0015墨田区横網2丁目5番5号

## えど友 サークルだより

**◆落語と講談を楽しむ会**
2月18日(火)藤村一夫さんの案内で、国立演芸場2月公演中席を観賞、若手落語家の4席に、林家正雀と金言亭馬生のリレー落語と続き、金言亭馬生一座の鹿芝居「世話情浮世横櫛～源氏店～」を観賞した。(鹿芝居とは：ハナシカ芝居、ただし華がないから、シカ芝居の意) 参加者19人。
3月4日(火)山内啓巳さん(芸名：太尾亭狸久)の解説で「言い立てのある噺」特集。DVD、CDを観賞しその後山内啓巳さんが実演した。皆が滑舌、記憶力に感嘆した。(言い立てのある噺とは落語の中のほぼ形の決まった一連の長セリフのこと)参加者18人。

**◆藩史研究会**
2月14日(金)安倍良男さんによる「仙台藩」で次の2点からまとめられた。第1は茨城県下館の小さな伊佐庄から南奥羽全域の大大名となった成立過程。第2は秀吉、家康との葛藤を経て、幕末まで大藩を守り通した近世の歴史である。参加者15人。
3月14日(金)有田欽哉さんから「松江藩」について発表があった。外様の堀尾氏が関ヶ原の勲功により24万石で松江に入った。その後、松平家が治めたが藩窮乏の時期を経て、不昧公として有名な治郷の家老による藩政改革で好転した。しかし、茶道具に凝り食いつぶしたのも不昧公であった由。参加者19人。

**◆古文書で「八丈実記」を読む会**
2月13日(木)休会。2月28日(金)参加者7人、3月13日(木)参加者7人、3月28日(金)参加者8人。以上3回で八丈島の島役人長戸路家に伝わる御用留(享保2年)のP3～20を解読。

**◆江戸名所図会輪読会**
2月20日(木)遠藤陽子さんの担当で霞関山太宗寺～新日暮里を発表。説明の担当地域が比較的固まっていたこともあるが、大変にわかりやすい説明で内容的にも地理的にもよく理解できた。参加者21人。
3月20日(木)石井義一さんの担当で千駄ヶ谷観音堂～鬼子母神を発表。千駄ヶ谷から下高井戸の広い範囲にある神社やお寺を訪ねたが、図会に記述されたこと以外はよくわからない所が多かった。参加者19人。

**◆「落語で江戸散歩」をなぞる会**
2月27日(木)今回はスペシャル版のやや遠出で、「えど友」第44号10頁の「落語で江戸散歩③道灌」の一部をなぞる意味で、越生の「山吹の里」関連の地を歩いた。参加者33人。
3月20日(木)「えど友」第53号10頁の「落語で江戸散歩⑫天災」をなぞって歩いた。三越前駅～三重テラス～福徳神社～椙森神社～三光稲荷神社～寄席・末広跡～大観音寺～西郷隆盛屋敷跡～蛎殻銀座跡～からくり櫓とまわり、15時からのからくり作動を見物、立川談幸さんの人形町由来の一席を聞いて、雨中の歩きのためここで打ち切り。参加者27人。
3月23日(日)3月20日(木)と同じ企画・コースで、雨で打切りとなった後のコースも含めて、からくり櫓～弁慶像～水天宮(仮宮)～甘酒横丁～元吉原碑～人形町と歩いた。参加者49人。

**◆日本の大道芸伝承会**
2月11日(火)烏山区民センターの「からすやま新年子どもまつり」に出演し、「七色唐辛子売り」、「バナナの叩き売り」、「南京玉すだれ」などを披露した。参加者3人。2月20日(木)烏山区民センターにて、3月9日(日)寺町通り区民集会所にて、3月20日(木)烏山区民センターにて、以上3回は来る3月22日の深川江戸資料館イベント「江戸の春」に応援出演のため、練習を重ねた。参加者各回とも3人。
3月22日(土)深川江戸資料館で行われたイベント「江戸の春～物売りと大道芸」に応援出演し、これまで練習した「お宝売り」、「辻占売り」、「南京玉すだれ」、「絵解き　地獄極楽」などを披露した。参加者3人。

**◆江戸を語る会**
2月22日(土)城東地区の町名と関連した思い出、エピソードを語り合った。 参加者10人。

＊　＊　＊　＊

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。**参加希望の方ははがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

## 友の会めも(開催日と人数)
平成26年2月～平成26年3月

◆役員会2月11日(火)14人。3月11日(火)13人。◆事業部会2月4日(火)24人。3月4日(火)27人。◆総務部会2月4日(火)24人。2月25日(火)20人。◆広報部会2月18日(火)12人。3月18日(火)11人。◆三部会交流会3月11日(火)39人。◆古文書講座　入門編　2月5日(水)午前81人・午後73人。3月5日(水)午前89人・午後61人。初級編　2月19日(水)午前53人・午後57人。3月19日(水)午前59人・午後50人。中級編　2月15日(土)大雪のため中止。3月15日(土)午前37人・午後24人。◆町方書上翻刻プロジェクト2月6日(木)A8人・B9人。2月20日(木)A8人・B9人。3月6日(木)A8人・B10人。3月20日(木)A8人・B10人。

第138回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年2月22日）

# 「昌平坂学問所と江戸の学歴社会」

講師　加藤芳典さん（文京ふるさと歴史館専門員）

**昌平坂学問所の設立**

徳川家康のブレーンの１人である儒学者林羅山は、上野忍ヶ岡の私邸内に寛永９年(1632)に孔子を祀る聖堂と私塾を建てました。５代将軍綱吉の意向により元禄３年(1690)に新しく湯島聖堂が建てられました。翌年に林家の学問所も同じ所に移り、林家が中心となり日本の儒教の中心地として営まれるようになりました。

田沼時代(一般的に賄賂、上下を顧みない言動が多くみられた時代といわれていた)の後をうけ、松平定信が始めた「寛政の改革」の中で朱子学(世の中の決まった枠組み【理】を重んじた)が奨励されました。その当時、儒教の解釈の違いから朱子学の他に陽明学、古義学、徂徠派などの様々な流派がありましたが、定信は寛政２年(1790)に「寛政異学の禁」をだして朱子学を官学としました。幕臣子弟を教育するために、徐々に林家の私塾から幕府官立の学問所へと整備され、寛政９年(1797)に「昌平坂学問所」として幕府直轄となりました。

**昌平坂学問所では**

林家が務めた大学頭(だいがくのかみ)を筆頭に御儒者(ごじゅしゃ)、学問所教授方が教え、学生は稽古人(けいこにん)(通い、寄宿、寄合)と呼ばれました。また稽古人の中から彼らを世話する役として、世話心得頭取、世話心得取締、世話心得、世話心得佐(こころえすけ)が選ばれました。世話心得などの役職は安政２年(1855)に稽古人の面倒をみる給料や資格付きの役として整備されました。授業は稽古人のみに授業する講義、講釈などのほかに、毎日行われる日講(にっこう)があり、これは浪人、町人などにも開放されていました。

ほかに学問所の仕事として、釈奠(せきてん)(儒教の祭祀)を行ったり、儒教の教科書や『徳川実記』『新編武蔵野国風土記稿』『御府内備考』などを、責任者を決めて地誌調、沿革調、地面取調などに分かれて出版していました。

**昌平坂学問所の試験**

学問所での幕臣の試験として寛政４年(1792)から学問吟味(15歳以上)が行われました。試験を受ける稽古人は、願書(経歴、受けたい科目の申請)を出します。各々に試験日程(半月かかる)、注意書き(持ち物、服装、欠席の連絡、弁当の持参など)が渡され受験。結果は甲科、乙科、丙科、落第で発表されました。甲科、乙科合格者には、御褒美が渡されました。有名な甲科、乙科合格者には遠山景晋(とおやまかげなお)、大田南畝(おおたなんぽ)、岩瀬忠震(いわせただなり)、永井尚志(ながいなおゆき)、中村正直(なかむらまさなお)などがいます。他の合格者も含めて、養子に入って活躍した人が多いのも特徴的です。

幼年の幕臣子弟の試験として四書五経などの素読を行う素読吟味が寛政５年(1793)から行われています。学問吟味と違って、試験の注意書きには焼き飯(おにぎり)がでるので弁当はいらないと書かれています。

**学問吟味を受けて**

有名な合格者ではありませんが、記録がたどれる御家人の合格者を紹介します。小普請組の服部新重郎は、弘化３年(1846)稽古人となり嘉永３年(1850)丙科合格、世話心得佐となりました。安政３年(1856)には乙科で及第し、世話心得取締になりました。その後安政５年(1858)に役付となり、のちに富士見宝蔵番、御徒目付となっています。祖父、父は小普請でしたが頑張って勉強して役職に就いたようです。元治２年(1865)の開成所の稽古人名簿には、洋学を学ぶ息子新之助が載っています。この名簿には、ほかにも勝海舟の息子小鹿(ころく)、四郎や勝家の家来の名も見えます。

藤井金三郎は在方御普請役の次男に生まれ、安政６年(1859)素読吟味を受けて褒章され、元治２年の学問吟味を受けて丙科合格し、慶応２年(1866)に世話心得になりました。これを受けて、慶応３年(1867)に旗本田村家(和宮様天璋院様御広敷番之頭)に養子に入りました。慶応４年２月２日まで行なわれた学問吟味への出願記録は残っていますが、動乱の中で、結果はわからないままになったようです。明治２年(1869)、新政府の神祇官に採用され内務省、農商務省で活躍し、その後第１回の本郷区の区会議員にもなっています。

**江戸の学歴社会とは**

明治以降、身分制の枠組みが外れて地方のお百姓さんの子供でも帝国大学を出ると役人になって立身出世ができるという、学歴社会が訪れます。

江戸時代は、一般的に身分制の枠組みが固まっていたといわれますが、服部新重郎や田村(藤井)金三郎は学問所で試験に合格することで、家の格を上げたり、格上の家に養子に入ったりしました。優秀者を取り立てる制度は、８代将軍吉宗の時に整備されました。番方では武芸などに優れた人、勘定方では筆算吟味(算術専門の試験)を行って合格した人を新たに採用していました。収入の少ない家の人が大きな仕事をできるように石高を足す足高(たしだか)の制も活用されました。

大多数は古くからの家柄の格と石高に縛られていた江戸時代にも学歴社会的な側面があったことを紹介しました。

**レポーターからひとこと**

古文書をたどることで時代を越えて頑張る若者の姿を垣間見ることができました。　　参加者151人。

【記録】文・写真：広報部会・佐藤美代子

第139回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成26年3月22日）

# 「江戸を愛した男 ―名主・熊井理左衛門小伝」

講師　小林信也さん（川村学園女子大学講師）

私が30年ほど前に江戸の露店などについて調べているときに、『市中取締類集』、『諸問屋再興調』などの幕府の史料のなかに熊井理左衛門という名前が頻繁に出てきたので、この人物に興味を抱きました。理左衛門は、石塚三九郎、鈴木市郎右衛門とともに天保13年(1842)に江戸の惣名主上席となり、この3人は苗字の使用が許されました。なお、町人や百姓には苗字が無いとの誤解がありますが、江戸時代でも、ほとんどの人が苗字をもっていました。ただ、武士、幕府に対して苗字が使えなかっただけです。

理左衛門は、たくさんの業務をこなし、それらの業務のトップになります。理左衛門は、冷静沈着な人、合理的な考え方をもっている人だと想像します。スーパーマンのような人です。

**名主理左衛門の原点**

理左衛門は、天明8年(1788)に築地上柳原町名主水田善三郎の甥として誕生し、文化4年(1807)、深川の名主熊井家へ養子に入りました。その2カ月後に永代橋崩落が起きています。

幕府が江戸町方の名主たちに各々が支配する町の現況や歴史について提出させた『町方書上』に、理左衛門も執筆しています。理左衛門は、支配町域だけでなく永代橋崩落の事故についても記述しています。崩落事故については、他の箇所と比較して異様に詳細に書かれています。例えば、「深川祭礼之節、橋上往来群衆致、昼四ツ時頃、右橋西の方より二十六側目、二十七側目、橋杭六本、地中え落込、…」とあります。崩落事故は老朽化が原因とされていますが、そういう誤解を覆す事実を詳細に記載することで、真因を後世に正確に伝えたいという理左衛門の強い意志が読み取れます。

**江戸惣名主上席へ**

天保12年(1841)、蛮社の獄の告発者で知られる鳥居耀蔵は、南町奉行矢部定謙を讒言により失脚させ、その後任として南町奉行になりました。その翌年に理左衛門らは、耀蔵の推挙で、江戸の惣名主上席となります。『藤岡屋日記』の天保14年(1843)4月1日の箇所では、南町奉行がこの3人の惣名主を連れ、徒歩で吉原巡見したと記述されています。これは、3人のお披露目ではないかと思われます。

天保改革は、都市政策に重きがおかれ、奢侈や風俗の取締、物価の引き下げ(株仲間の解散など)、人口の抑制(人返し令)が三つの柱でした。この改革で、膨大に増えた行政の仕事を担わせるため、幕府が強力な名主組織を整備して掛名主体制をつくりました。名主は、支配町内の仕事の他、掛名主として江戸の町全体の仕事もするようになりました。掛名主のトップに立った理左衛門は、相当な激務をこなしていました。

**水茶屋「亀の尾」が都市行政の中心に**

天保14年(1843)に水野忠邦が失脚した後も名主組織は活動しています。舟運が盛んだった当時は、水路は重要なインフラでした。これを維持するために、流れ込んでくる土砂の浚渫が必要となりますが、十分にできていません。これを解決するため、川浚いを一括して行う川々浚掛名主ができました。町会所からの資金援助がありましたが、資金が底をついてからは、川浚いした土砂を埋め立てに使い、その埋立地を入札で町人に払下げ、その収入で、更に川浚いをするという方法で事業を8年間進めました。新しいかたちの都市インフラ整備事業になりました。

嘉永4年(1851)3月からの株仲間再興政策においても、中核を担いました。その作業は、水茶屋「亀の尾」で行われました。これは、複数の名主が立ち会って作業をすることで、互いのチェックが可能となり、世間から噂されるような不正が起きないようにするためでした。諸問屋再興の後も、「亀の尾」の名主寄合が、商人たちの紛争に関する「取調」の場として機能していました。

**失脚**

安政4年(1857)、元浪人の鈴木藤吉郎が町奉行所与力上席になります。その4カ月後、米方掛名主を廃止し、以降は直々に町奉行所が扱うようにしました。米会所の開設を画策していたと思われます。この年の暮れに理左衛門たち3人の惣名主は、突然、名主の地位をはく奪され、翌年2月に小伝馬町の牢獄に入牢させられました。砂糖商人からの収賄という罪です。同時に、掛名主体制が廃止されました。これらのことから、江戸町方の行政のイニシアチブを町奉行所が取り戻そうとしたのではないかと思います。投獄後、間もなく石塚三九郎と鈴木市郎右衛門は病死しましたが、理左衛門は、劣悪な環境を生き延び、江戸追放の裁決を受けました。理左衛門は、強い意志の持ち主だと思われます。

**レポーターからひとこと**

熊井理左衛門は、今の優れたビジネスマンのような人で、時代の流れに翻弄された波瀾万丈な人生を生きたように思いました。　参加者135人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 26 年 3 月 30 日）

# 「広重『名所江戸百景』周辺探訪―その10（新橋～芝 周辺）―」

今回の『名所江戸百景』巡りは、桜の花が見頃を迎えた春の一日、虎ノ門から赤羽橋までを歩きました。

**虎ノ門から愛宕山へ**

東京メトロ虎ノ門駅に集合後、降りしきる雨の中を歩き始めました。「虎の門外あふひ坂」絵に描かれている葵坂は、溜池の堰から外濠にそって虎の門外へ下っている坂でしたが、現在はビルの中です。近くにある金刀比羅宮はもともと讃岐丸亀藩邸内にあったもので、四神（朱雀・青竜・玄武・白虎）の取り付けられた珍しい鳥居が目を引きます。東に進んだ交差点のあたりから愛宕山方面の雪景色を描いたのが「愛宕下藪小路」絵です。この地名は加藤越中守の屋敷内にあった竹藪に由来するそうです。

▲愛宕神社

南へ向かうと愛宕山が見えてきます。愛宕神社正面の急勾配の石段（男坂）は、曲垣平九郎が馬で駆け上って梅の枝を取ってきたという「出世の石段」として有名です。今回は裏手の女坂から上りましたが、上から見下ろしても険しさがよく分かります。

「芝愛宕山」絵は強飯（ごうはんしき）式を終えた使者が石段を上ってきた場面を描いています。境内には、井伊直弼を襲った水戸浪士たちが集結した場所を示す「桜田烈士愛宕山遺跡碑」もありました。神社の向かいのＮＨＫ放送博物館でしばし雨宿り。館内には、昔のポスターやラジオ・ＴＶ機器などが展示されていて、とても楽しめました。

▲青松寺墓地

下山してすぐ、曹洞宗の江戸三箇寺の一つ青松寺があります。本堂裏手の墓地には、槍持芦田勘助、儒学者井上金峨（きんが）、肉弾三勇士の墓があり、普段は立ち入ることができませんが、この日は特別に見学することができました。東に進んで御成門跡を過ぎたあたりにはかつて愛宕山下大名小路があり、浅野内匠頭切腹の地として有名な田村右京太夫の上屋敷や、柳生但馬守の屋敷などがあったそうです。

**芝増上寺周辺を巡る**

芝公園に入ると、桜に彩られた増上寺の山門が見えてきます。徳川家の菩提寺である増上寺には、６人の将軍（秀忠・家宣・家継・家重・家慶・家茂）と近親者の位牌が安国殿に安置されています。その裏手に徳川家の墓地があり、途中の沿道には水子地蔵と風車がずらりと並んでいました。寺の東側に位置する大門の手前から、参拝人と托鉢僧の一行を描いたのが「芝神明増上寺」絵です。

大門近くの脇道を入ると、「だらだら祭り」や「め組の喧嘩」で知られる芝神明宮（飯倉神明宮）があります。さらに第一京浜を南に進んで首都高をくぐったあたりが金杉橋で、「金杉橋芝浦」絵には欄干越しに芝浦の海が描かれていますが、現在では全く見ることができません。

▲増上寺

再び芝公園へ戻ると、芝東照宮の前に丸山古墳の丘が現れます。かつて丘の上には増上寺の五重塔がそびえていましたが、戦災で焼失しています。「増上寺塔赤羽根」絵は五重塔ごしに赤羽根橋方面を描いたものです。ここから都営地下鉄大江戸線の赤羽橋駅まで歩いて解散、雨と風を存分に味わった見学会でした。

参加者110人。

【取材】文：広報部会・菊池真一
写真：同・内匠屋京子

# 第６回「えど友研究発表会」の発表者を募集します

ご好評をいただいております「えど友研究発表会」を今年度も行います。発表会の主旨は、長年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答や討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料等のお支払いは致しません。２テーマを予定し、１テーマにつき質疑応答を含め１時間程度の予定です。発表会は８月６日（水）の13時00分から江戸博１階会議室で開催予定です。日頃の成果発表に奮ってご応募くださるよう発表者を募集します。

発表を希望する方は、はがきに「発表会応募」と明記し、氏名、会員番号、電話番号、テーマを書いて事務局宛お送りください。折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りいたしますので、所要事項をご記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって正式の応募といたします。応募締め切りは５月末です。なお応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては６月上旬に応募者にご連絡いたします。

【企画担当責任者】内山文伸（事業部会）

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成26年3月27日）

## 江戸東京博物館開館20周年記念特別展「大江戸と洛中～アジアのなかの都市景観～」

3月18日(火)から開催の「大江戸と洛中～アジアのなかの都市景観～」の友の会特別観覧会が3月27日(木)17時から行われました。

初めに本展覧会の担当、齋藤慎一学芸員から、今回の企画が、世界に視野を広めて江戸の独自性を考えることを主題としていること、都城制と呼ばれるアジアの都市づくりの伝統に立脚している京都に比べ、一方の江戸はその影響を受けながらも、独自の変遷を遂げて、それが日本各地の都市づくりへと広まっていったことなどの説明がありました。

前回の特別展「大浮世絵展」に比較して今回は、私は少し学術的で、地味ではという印象を持って館内に入りました。ところがどうして、まず入口に飾られた「プロローグ」の「東海道五十三次図屏風」から始まって、「世界の都市」、「洛中への系譜～都市の中心と周縁～」、「将軍の都市～霊廟と東照宮～」、そして「エピローグ～都市図屏風」まで、5つで構成されたブースすべてにわたって見どころ満載、そのスケールの大きさに驚かされました。

重要文化財の「十二都市図世界図屏風」は、中央部の世界図の両脇に、世界の12都市の鳥瞰図を配した南蛮絵画で実にカラフルで美しいものでした。また、「漢訳版世界地図」の写本、「坤輿万国全図」は大きく、精緻で特に興味深く鑑賞しました。そして江戸博が所蔵する数多くの旧江戸城写真ガラス原版(すべて重要文化財)も壮観でした。

さらに日光、久能山とならび、江戸城内紅葉山の東照宮は、将軍参詣の重要な存在でしたが、そのご神体の前にかけられていた御簾が岡山県津山市内で昨年発見され、今回初公開されました。新発見の「紅葉山東照宮御簾付由緒書」の実物を間近で見て、その精巧な作りと、装飾の絢爛豪華さにびっくり、パンフレットからは想像もできないきらびやかさでした。

また江戸博所蔵の紀伊、水戸など、各徳川家に伝来した具足5領が一堂に並び展示されて、辺りを威圧していました。

「武州州学十二景図巻」は、慶安元年(1648)に描かれた江戸城天守で、初日の出にそびえるさまは、かつての威容が忍ばれ、江戸っ子にとっては誇らしい気分になりました。

これだけの膨大な展示物を一回で鑑賞するのは相当な体力が必要になります。私は図録を見ながら資料の解説を読んで、もう一度観覧しに来ようと思いました。

展示期間は5月11日(日)までです。もしまだご覧でない方は、ぜひじかに本物を鑑賞されることをおすすめします。20周年記念の最後を飾るにふさわしい展覧会だと思います。

参加者119人。

【記録】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・前田太門

# 江戸博クリップ

## 寄席の楽しみ

管理課長　各務　豊（かがみ　ゆたか）

有楽町パスポートセンターから江戸博に赴任し、はや2年が経ちます。これまで江戸東京の歴史とは縁遠い日常を送ってきましたが、おかげ様で少しは文化の香りに接する機会も得るようになりました。特に、昨年正月の伝統芸能フォーラムで聞いた落語「八五郎出世」は衝撃的で、今でも忘れられません。江戸っ子特有の照れ隠し、やせ我慢の下から垣間見える細やかな人情に、参りました。泣きました(事業主管課長のくせに)。惚れました。以来、時間をみては都内の定席に足を運んでおります。

いちばん好んで行くのは、上野です。浅草は何やら観光客が多くて落ち着かず、新宿はちょっと気取った感じがします。池袋は一度行ったら満員で入れませんでした。

見たい番組があるときは、5時45分の定時に何気なく退館、ダッシュで大江戸線に飛び乗り、上野御徒町へ。まずは松坂屋の「デパ地下」に突入、弁当とカップ酒を調達します。飲食しながらの鑑賞は邪道とのご意見もあると思いますが、ご寛恕ください。私にはこれが最高の楽しみなんですから。

ある真打の常套句「出てくる噺家の十人に一人は、やる気がありますから」。けだし名言です。落語をやらずに雑談で終わる人も少なくありません。その緩い感じも好きです。色物も、太神楽、曲独楽、紙切り、どれもこれも定番で「次はこうなる」とわかっていても、そのとおりになるのが楽しいのです。さすがにトリ(番組では「主任」といいます)は、真面目にやっていただけることが多く、また来ようという気にさせてくれます。

まだまだ半可通ですが、寄席通いという素晴らしい道楽を教えてくれた、この職場に感謝しております。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸 名所図会を歩く…⑬

## [萬松山東海禅寺から貴船明神社]

鎮守橋から荏原神社へ

今回から巻之二、天璇之部に入ります。巻之一天枢之部の最後は品川区の谷山でした。巻之二はその続きで品川区の東海寺から始まり、多摩川を越えて川崎から横須賀近辺までを網羅しています。このシリーズでは、多摩川まで南下して行くことにします。

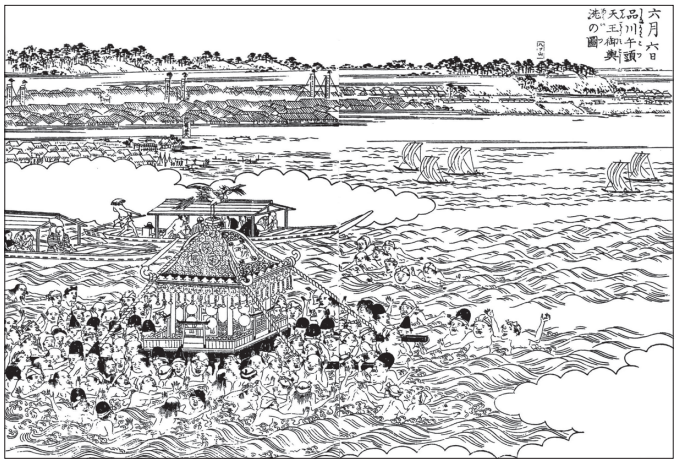
### 萬松山東海禅寺

「品川北馬場にあり。花洛大徳寺派の禅宗江戸触頭の一員たり。…寛永十五年戊寅　台命を奉じて澤庵和尚開創する所の禅園なり」とある東海禅寺を京急新馬場駅から訪ねました。東海寺は家光の命により沢庵のために創建されたお寺で、広大な寺域を有していました。明治維新後は旧塔頭の玄性院が寺号を引き継ぎ、往時の隆盛ぶりはまったく失われています。境内も旧玄性院の境内で、元禄５年(1692)鋳造の鐘楼、「世尊殿」の額が掲げられた仏殿と、越屋根を持つ庫裏があります。

開山沢庵和尚の廟は元の東海寺の敷地で、鉄道線路と山手通りにはさまれた、今は大山墓地と呼ばれる三角地帯の中にあります。山手通りを西に進み、ガードをくぐって坂道を線路沿いに登っていくと「史蹟　沢庵の墓」という石柱が見えてきます。沢庵の墓は「方丈の西北の隅、丘の上に有り。開山和尚の遺志により石塔を建てずと自然の巨石を置く」とあるように、扁平な自然石を置き、四方に低い石垣がめぐらされている質素なもので、図会の挿絵のままです。図会には賀茂真淵と服部南郭の墓が並んでいる挿絵もありますが、今は離れた場所にあります。賀茂真淵は広い墓域に石の鳥居が立っているのが目印です。この墓地はほかにも渋川春海や鉄道の父と呼ばれる井上勝など、著名な人の墓が多く有り、個人的にはこちらの方に興趣を覚えました。

### 牛頭天王社から問答河岸

大山墓地からまた山手通りに戻り、第一京浜を左折するとまもなく牛頭天王社、現在の品川神社です。「東海寺柵門の外、左の山の上に有り」とあるように、東海寺の寺域と接していました。神社の由緒書きには文治３年(1187)、源頼朝が安房国洲崎明神を勧請したものとありますが、図会にははっきりとした記述はありません。祭礼は６月７日に行われ、海中渡御の様子が挿絵に描かれています。入り口の石造の鳥居は、２本の柱にそれぞれ昇り龍、下り龍の彫刻が施されためずらしいものです。急な階段を上ると、左手に富士塚への登り口があります。この富士塚は明治２年(1869)に作られました。頂上まで登るとちょうど京急の高架が少し下に見えます。明治の頃はさぞや品川の海の眺望が素晴らしかったことでしょうね。


▲品川牛頭天王御輿洗いの図

家康が関東入国後に別邸を作ったため、地名となったという御殿山はこの神社の北の山続きでした。北品川駅前の第一京浜を隔てた西側の丘陵地帯で、今では地名が残るばかりですが、往時は花見の名所として有名でした。北品川の踏切を渡って海側へ下る狭い道は清水横町と呼ばれ、旧東海道に突き当たります。名前の由来は「此の井、清泉にして干魃にも涸る事なしといへり」とあるように、清水が湧き出た場所があったからのようです。近くには問答河岸の説明板があります。沢庵和尚が家光を送ってここまで来たときに問答があったとされています。

### 利田神社から貴船明神社

問答河岸から八ツ山通りに出て南下し、利田神社に向かいます。この社は寛永３年(1626)、東海寺の沢庵がここに弁財天を勧請したのが始まりとされています。図会では洲崎弁天という題で、海中に突き出た洲の先端に社の建つ挿絵のみがあります。このあたりには鯨が迷い込んだらしく、神社本殿の左側には寛政10年(1798)に捕らえられた大鯨の供養碑と鯨塚があります。この時は江戸中の評判となり、時の将軍家斉も浜御殿で上覧するという騒ぎでした。八ツ山通りをさらに南下し、寄木明神社に向かいます。品川漁師町の鎮守で、日本武尊が御東征の折の逸話が社伝に記されています。石蔵造りがめずらしい本殿と、裏菊紋の賽銭箱が印象に残りました。

寄木神社から目黒川にかかる品川橋に向かいます。この橋は「江府の喉口にして東海道五十三驛の首なり。日本橋より二里、南北と分つ」とある「品川驛」の中間に有り、中の橋と呼ばれていました。橋を渡って目黒川の右岸を歩き、次に赤い鎮守橋を渡って貴船明神社(現荏原神社)に向かいます。貴船明神社は「驛舎南北品川境、中の橋の南岸海道より右に有り」と図会にはありますが、昭和３年(1928)に目黒川の河道が変更されたため、南品川の鎮守でありながら、北品川に入ってしまいました。社殿は弘化元年(1844)の建造で拝殿向拝の上部には見事な彫刻が施され、拝殿の屋根の両脇からは龍が首を伸ばして天水桶に雨水が落ちる仕掛けになっています。境内目黒川寄りの寒緋桜が満開になっていて、春の近いのを感じた日でした。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

# 催事案内

## 古文書講座

### ◆5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師 / 最近の研究テーマ：近世・近代における有識故実、江戸幕府御用絵師研究等)
- 開催日：5/17(土)、6/21(土)、7/19(土)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻 / 最近の研究テーマ：近世対外関係、琉球。特に身分制度等の社会構造)
- 開催日：5/21(水)、6/18(水)、7/16(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻 / 最近の研究テーマ：将軍姫君の婚姻と幕藩関係、江戸城大奥)
- 開催日：5/14(水)、6/4(水)、7/2(水)

---

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

## 友の会特別観覧会

### ● 2014年NHK大河ドラマ特別展「軍師　官兵衛」

◆今年のNHK大河ドラマの「軍師　官兵衛」関連の特別展です。信長、秀吉、家康の天下人の時代に、西日本を舞台に活躍し歴史を創った知将で、大大名となる基礎を築いた黒田官兵衛ということなので友の会の皆様には興味のあることでしょう。担当されました齊藤学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。
- 開催日：6月6日(金)17時～19時
- 申込締切：5月22日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

## 見学会

### 切絵図で歩く「鬼平犯科帳」－その1－ 九段下～麹町～四谷

◆池波正太郎が書いた「鬼平犯科帳」は、長編5話を含む135話の、実在した人物を主人公として書かれた小説です。作者が「切絵図」を参考にしながら書いたという「鬼平犯科帳」には様々な江戸の町が登場してきます。もちろん小説の中に登場する盗人宿や襲われた商家があるわけはないのですが、「鬼平犯科帳」に登場する町・舞台を切絵図を片手に、主人公たちの気持ちになって歩いてみたいと思います。今回は、九段坂～清水門外の役宅～麹町～四谷坂町の組屋敷を巡ります。物語をなぞるものではないので特定の作品はありませんが、今回は、文春文庫・第16巻「白根の万左衛門」、第8巻「流星」、第1巻「老盗の夢」などに登場する場所が何度か出てきます。所要時間は見学時間を含めて約3時間余、都営地下鉄新宿線「曙橋」駅での解散となります。
- 開催日：6月8日(日)　12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅の2番・地上出口
- 申込締切：5月29日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】谷口幸二(事業部会)

## 友の会セミナー

### 第142回「寄席文字・江戸文字を楽しむ」

**講師　橘　右之吉さん**(橘流寄席文字・江戸文字書家)

◆「江戸文字」と呼ばれる文字は、江戸時代に親しまれた数種の文字の総称です。今回はその中から「橘流寄席文字」についてのお話と、実演をしていただきます。寄席文字は、寄席のめくりや寄席ビラで使われる文字ですが、起源は宣伝のため髪結床など人の集まるところに貼られたビラといわれています。特徴は、お客がいっぱいに入るように余白を少なくし、右上り筆勢で、筆に墨をタップリとつけて、一気に書き上げるところにあります。現在でも、国立演芸場のポスターなどにも使われています。当日実演で一文字を書いていただき、希望者10名の方に贈呈します。

◆講師略歴：たちばな　うのきち
1950年、台東区生まれ。日本デザイン専門学校卒。1965年、橘流寄席文字家元・橘右近に師事。正式伝承者「橘右之吉」の筆名を許される。
- 開催日時：6月28日(土)14時～15時30分
- 申込締切：6月16日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明・五十島正修(事業部会)

## 「えど友広小路」原稿募集！

江戸東京に関連することで、普段あなたが思ったり感じたりしていることはありませんか？　日頃からいろいろ関心を持って調べたりしていることはありませんか？

それを1000字程度の文章にして、えど友広小路の「会員投稿欄」にぜひご応募下さい。広報部会ではみなさんの投稿をお待ちしています。順次掲載させて戴きます。

原稿は江戸博「友の会事務局」宛にお送り下さい。

**送付先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1**
**江戸東京博物館「友の会事務局」**

また、原稿を電子メールでも受け付けできるようにしました。下記専用アドレスにお送り下さい。ご意見、ご要望をメールでいただくこともできますので、ご活用下さい。

広報部会メールアドレス：
**edo_tomo_koho@yahoo.co.jp**

## えど友ホームページを見てみよう！

友の会のホームページをご利用されていますか。

このホームページでは、

- 会報『えど友』が PDF ファイルの形式で１号から最新号まで読むことができます。
- ホームページに掲載する『えど友』 PDF 版を78号から写真などをカラーにしました。
- 見学会や「江戸名所図会を歩く」については、『えど友』に掲載できなかった写真も多数載せています。地図も掲載していますので、自分で行ってみることが出来ます。
- 「江戸東京情報」として、江戸東京に関係する展覧会・イベントの最新情報を掲載しています。
- 「江戸東京情報」のリンクから『江戸名所図会』の原本が見られます。

他にもたくさんの情報が掲載されています。何が見つかるか、えど友ホームページを探検してみませんか？「えど友」で検索すると、すぐに出てきますよ！

# 会員優待のお知らせ

会期残り僅か お見逃しなく！

**●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展**

### 「大江戸と洛中 ～アジアのなかの都市景観～」

会　期：3月18日(火)～5月11日(日)
休館日：毎週月曜日　ただし5月5日(月･祝)は開館、5月7日(水)は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

**次回予告**

**●2014年NHK大河ドラマ特別展**

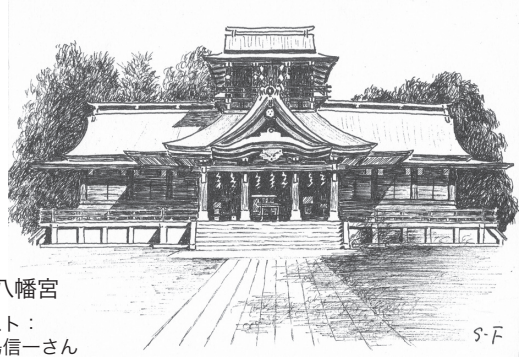
### 「軍師　官兵衛」

会　期　5月27日(火)～7月13日(日)
休館日：毎週月曜日
会　員：一般650円、65歳以上320円、大･専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大･専門生830円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

**企画展のご案内**

### ●「徳川将軍の書画」

会　期：　4月26日(土)～6月8日(日)
休館日：5月7日(水)5月26日(月)6月2日(月)
会　場：　常設展示室5階　第2企画展示室



富岡八幡宮
イラスト：
福島信一さん

## お申込方法

**＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記して下さい。お間違いないよう、お願いします。**

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号**(必須)**、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。


会報＜えど友＞第79号
平成26年5月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、田端道宏、光田憲雄
**発行：江戸東京博物館友の会**
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910